

第38回メディコピア教育講演シンポジウム



認知症

アルツハイマー病の克服に向けて

矢富 裕 深川 雅史 滝川 一



開催日：2018年1月6日（土）

会 場：東京国際フォーラム（有楽町駅前）

認知症

アルツハイマー病の克服に向けて

13:00～13:10 富士レビオ(株)代表取締役社長挨拶 芦原 義弘

13:10～13:15 はじめの言葉 矢富 裕 (東京大学大学院医学系研究科 臨床病態検査医学 教授)

前半の部 13:10～14:50

「ここまで進んだ認知症の診療・研究」

13:15 司会の言葉 深川 雅史 (東海大学医学部 内科学系 腎内分泌代謝内科 教授)

13:20 認知症医療の現状と課題 岩田 淳 (東京大学医学部附属病院 神経内科 講師)

13:50 認知症の診断マーカーの進歩 池内 健 (新潟大学脳研究所 生命科学リソース研究センター 教授)

14:20 アルツハイマー病の治療薬開発をめざして 岩坪 威 (東京大学大学院医学系研究科 神経病理学分野 教授)

後半の部 15:10～17:00

「地域で支える認知症」

15:10 司会の言葉 滝川 一 (東京大学医学部 内科学 主任教授)

15:15 認知症の人にやさしいまちづくり 徳田 雄人 (NPO法人 認知症フレンドシップクラブ 理事)

15:45 特別発言「介護のミカタ」～よりよい介護のために～ 荒木 由美子 (タレント)

16:15 総合討論(40分)

16:55～17:00 おわりの言葉 矢富 裕

はじめの言葉



東京大学大学院医学系研究科
臨床病態検査医学 教授

ヤトミ ユタカ
矢富 裕



認知症

第38回メデイコピア教育講演シンポジウム
◆アルツハイマー病の克服に向けて

主な研究領域

臨床検査医学、臨床血液学、血栓止血学、生理活性脂質

主な著書

編著「臨床検査法提要」、「今日の臨床検査」、「臨床検査値判読ハンドブック」、「抗血栓療法のノウハウとピットフォール」、「健康診断と検査がすべてわかる本」、「出血性疾患の実践診療マニュアル」など

- 1983年 東京大学医学部医学科卒業
東京大学医学部附属病院内科
- 1984年 東京日立病院内科
- 1986年 東京大学医学部附属病院第一内科
- 1991年 山梨医科大学医学部臨床検査医学助手
- 1997年 山梨医科大学医学部臨床検査医学助教
授
- 2003年 東京大学大学院医学系研究科臨床病態
検査医学助教授
同医学部附属病院検査部副部長
- 2005年 東京大学大学院医学系研究科臨床病態
検査医学教授
同医学部附属病院検査部部長
- 2011年 東京大学大学院医学系研究科副研究科
長（併任）

医学・医療のタイムリーな問題・話題に関して、我が国の最先端研究者により、広い視野から、かつ、わかりやすく講演・議論いただいているメデイコピア教育シンポジウムは今回で第38回を迎える。幸い、好評を博し、盛会を続けているが、今回のシンポジウムは、毎年 of 参加者からのご要望も多かったこともあり、「認知症 -アルツハイマー病の克服に向けて-」をテーマとし、岩坪 威 教授（東京大学）のご指導もいただき、構成させていただいた。

高齢化時代を迎え、認知症の問題はますます大きくなり、それへの対策は我が国の医療における喫緊の課題となっていることは周知の通りである。その一方、認知症の中で多くを占めるアルツハイマー病などについては、病態解明が進み、診断手法の進歩により早期診断が可能になるとともに、治療法の開発も進んでいる。

以上のような状況のもと、認知症に関わる臨床、研究、社会活動の面で、我が国の指導的立場におられる方々を講師としてお招きして、わかりやすい内容のご講演・ご議論を展開いただけることはたいへん意義深いと考えられる。本シンポジウムにより、改めて、認知症に関する最新かつ正しい理解を深めていただけると期待している。

司会の言葉



東海大学医学部 内科学系
腎内分泌代謝内科 教授

フカガワ マサフミ
深川 雅史



主な研究領域

慢性腎臓病、糖尿病性腎症、水電解質代謝異常、骨ミネラル代謝、尿毒症

主な著書

「やさしい腎臓病患者のためのリン・カルシウム代謝の自己管理～保存期・透析期から移植期まで～」(医薬ジャーナル社)

「レジデントのための腎臓病診療マニュアル 第3版」(医学書院)

「腎臓・水電解質コンサルタント 第2版」(金芳堂)

「透析患者の内科管理コンサルタント」(金芳堂)

- 1983年 東京大学医学部医学科卒業
東京厚生年金病院内科、公立昭和病院腎臓内科勤務
- 1990年 東京大学医学部附属病院第一内科助手
- 1992年 米国バンダービルト大学リサーチフェロー
- 1995年 宮内庁侍従職、侍医
- 1997年 東京通信病院循環器科(腎臓内科)医師
- 2000年 神戸大学医学部附属病院助教授、代謝機能疾患治療部部长
- 2007年 神戸大学大学院医学研究科内科学講座腎臓内科学分野長、戦略的独立准教授、腎・血液浄化センター長
- 2009年 東海大学医学部内科学系腎内分泌代謝内科専任教授

超高齢化時代を迎え、介護を必要とする高齢者が年々増加しており、医療費の増加の抑制だけでなく、医療システムそのものの対応と変革が求められている。認知症は、その中でも最も重要な疾患のひとつである。

他の多くの病気を同様に、認知症の診療も診断から始まる。まず、患者自身だけでなく、家族にとっても、加齢にともなう変化なのか病的な変化なのかを判断することはむずかしく、どのような場合に受診すべきかを知ることは重要である。

認知症の病態は、脳血管性だけでなく変成性疾患でも生じ、その中でもアルツハイマー病が長年注目されてきた。

最近の病態解明の進歩により、アルツハイマー病では、症状が顕在化するはるか前から、代謝性の変化が生じていることがわかってきた。このことを利用し、より早い段階で変化をとらえ、予防、治療を行うことが実現可能になってきている。

前半のセッションでは、これらの診療と研究の進歩をわかりやすくまとめ、将来の展望について考えてみたい。

認知症医療の 現状と課題



東京大学医学部附属病院 神経内科 講師

イワタ アツシ
岩田 淳



第38回メデイコピア教育講演シンポジウム
認知症
◆アルツハイマー病の克服に向けて

主な研究領域

神経変性疾患の病態と治療研究

タンパク質凝集と細胞内タンパク質分解機構の分子生物学的研究、孤発性神経変性疾患におけるエピゲノム異常の関与についての研究、アルツハイマー病の早期検出と介入についての研究

主な著書

共著「最新内科学」(西村書店)

「ポケット版 神経内科検査・処置マニュアル」(新興医学出版社)

「医師として知らなければ恥ずかしい50の臨床研究 神経編」(メディカルサイエンス・インターナショナル)

「認知症疾患診療ガイドライン2017」(医学書院)

「アルツハイマー病 認知症疾患 -臨床医のための実践ガイド-」(朝倉書店)

- 1993年 東京大学医学部医学科卒業
- 1995年 東京大学医学部附属病院神経内科入局
- 2002年 東京大学大学院医学系研究科修了博士(医学)
スタンフォード大学ポスドク
- 2005年 東京大学医学部附属病院研究拠点形成
研究員
- 2008年 東京大学医学部附属病院分子脳病態科学
特任准教授
- 2010年 科学技術振興機構戦略的創造事業「さ
きがけ」研究員
- 2015年 東京大学医学部附属病院神経内科講師

認知症と診断される方の数は高齢化社会の進展に伴って増加の一途をたどっている。私たち医師はその様な中でどのように患者さんと接し、どの様に診療をしているだろうか？では、そもそも認知症とはどういう状態なのだろうか？物忘れがあったらそれで認知症と診断されるのだろうか？実はそのような基本的なことがまだまだよく分からないという方が多いのではないかと思う。歳をとったらだれでも記憶力は低下する。では認知症での記憶力の低下と年齢による記憶力の低下は何が違うのだろうか？そして、認知症と診断される方ではどのような症状が特徴的なのだろうか？どういう症状があったら認知症を心配しなければならないのだろうか？実は私たちの外来を受診される方で、これらの事を正確に理解されている方はほとんどおられない。しかし、これらの事を正しく理解することが認知症を理解するために一番重要なことである。

このようになんともなく知っているようでハッキリとは分からない「認知症のホントの事」をお話したい。

認知症の 診断マーカーの進歩



新潟大学 脳研究所
生命科学リソース研究センター
教授 イケウチ タケシ
池内 健



主な研究領域

認知症領域、臨床神経学、臨床ゲノム医学

主な著書

「認知症疾患診療ガイドライン2017」(医学書院)

「Annual Review神経2017」(中外医学社)

「NHKきょうの健康：筋肉・骨・歯・認知症」(主婦と生活社)

「NHKきょうの健康：認知症の新常識」(NHK出版)

「新しい診断と治療のABC アルツハイマー病第2版」(最新医学社)

1991年 新潟大学医学部卒業

1993年 新潟大学脳研究所神経内科入局

2000年 新潟大学医学研究科大学院博士課程修了(医学博士)
シカゴ大学神経生物学センター博士研究員

2003年 新潟大学医歯学総合病院神経内科助手

2007年 新潟大学脳研究所生命科学リソース研究センター助教

2011年 新潟大学超域学術院准教授

2013年 新潟大学脳研究所生命科学リソース研究センター教授

認知症の診断は、二つのステップから構成される。最初のステップは認知症か否かの判断で、この過程ではご本人、ご家族から病歴や日常生活の様子を詳しく聴取する。認知症と判断されれば、認知症を起こしている原因疾患を特定する。病型診断とも呼ばれるこのステップでは、アルツハイマー病などの変性性認知症、脳血管性認知症等の原因疾患を鑑別する。この過程では、画像検査と並んで脳脊髄液や血液を用いた診断マーカー検査が補助診断に有用である。アルツハイマー病の方の脳脊髄液ではアミロイド β 42は低下し、総タウ、リン酸化タウが上昇する。これらの診断マーカーを組み合わせると、アルツハイマー病の診断精度が著しく向上する。脳脊髄液中のリン酸化タウは、認知症の鑑別診断を目的に保険診療で検査が可能であり、認知症の専門外来を中心に日常診療に活用されている。脳脊髄液診断マーカーは、認知症の脳内病理を反映して変動することから、認知機能症状が出現する以前の段階(無症候期)から、その変化を検出することが可能である。無症候期の段階に、診断マーカーで将来の認知症発症のリスク評価を行い、疾患修飾薬により認知症の発症を未然に防ぐ先制医療が探索されている。

このような現状をふまえ、本講演では「認知症の診断マーカーの進歩」についての最新情報をお届けする。

アルツハイマー病の 治療薬開発をめざして



東京大学大学院医学系研究科
神経病理学分野 教授

イワツボ タケシ
岩坪 威



認知症

第38回メデイコピア教育講演シンポジウム
アルツハイマー病の克服に向けて

主な研究領域

神経病理学（アルツハイマー病・パーキンソン病の分子病態）、アルツハイマー病治療薬開発に関する研究

主な著書

「Visualization of A β 42 (43) and A β 40 in senile plaques with end-specific A β -monoclonals: Evidence that an initially deposited species is A β 42 (43).」(Neuron 13:45-53, 1994)

「先制医療の実現に向けて アルツハイマー病」日本の未来を拓く医療-治療医学から先制医療へ pp118-127, 2012 井村裕夫(編)(診断と治療社)

- 1984年 東京大学医学部卒業
- 1986年 東京大学神経内科入局
国立水戸病院、日本赤十字社医療センター、東京都老人医療センターを経て、1989年 東京大学医学部脳研病理助手
- 1992年 東京大学薬学部機能病態学教室客員助教
- 1998年 東京大学大学院薬学系研究科・臨床薬学教室教授
- 2007年 東京大学大学院医学系研究科・神経病理学分野教授
J-ADNI主任研究者 現在に至る

アルツハイマー病 (AD) の病因分子を標的とする疾患修飾療法 (disease-modifying therapy; DMT) が本格的に開発されはじめているが、現時点では有効性の実証されたものは皆無である。AD脳の病理学的変化は、神経細胞の脱落、老人斑などの形態をとる β アミロイド蓄積、タウタンパク質よりなる神経原線維変化の出現を3主徴とする。ADに特異性が高い β アミロイドについては、凝集性の高いA β 42分子種の蓄積がAD脳に最初期に生じる病変であること、家族性ADの病因遺伝子APP及びプレセニリンの変異によりA β 42の産生が亢進することなどから、 β アミロイドをADの病因分子と考えるアミロイド仮説が支持され、DMTの治療標的として有望視されてきた。セクレターゼ阻害薬によるA β の産生抑制、抗体によるA β 除去の促進などの大規模な治験も行われているが、認知症発症後のAD期ではいまだ成功は得られていない。アミロイドの蓄積は、認知機能障害の発症に15年以上先行して生じることから、ADの病因過程に作用するDMTは、認知症症状顕在化以前の軽度認知障害 (MCI) 期、それに先行するプレクリニカルAD期 (病理変化陽性だが無症候の時期) に開始するのが理想的と考えられる。このために画像・バイオマーカーを含めたADの客観的な評価法の確立が重要となる。脳内の β アミロイドをPETスキャンで検出するアミロイドイメージングや、脳脊髄液のA β (1-42) などの体液バイオマーカーを指標に取り入れ、AD進行過程のモニター・発症予測法の確立を目指そうとする臨床観察研究AD Neuroimaging Initiative (ADNI) が米国で行われ、本邦でもJ-ADNI研究が成功裡に終了した。さらにA4研究など、プレクリニカルADに対する抗A β 薬を用いた大規模な予防治験が開始されつつある。

本講演では、ADの分子病態解明に基づくDMT実用化の現状と問題点について論じたい。

司会の言葉



帝京大学医学部 内科学 主任教授

タキカワ ハジメ
滝川 一



主な研究領域

内科学、消化器病学

主な著書

編集「消化器ナビゲーター」、「ここまできた肝の科学」、「講義録 消化器学」など

- 1977年 東京大学医学部医学科卒業
東京大学医学部附属病院内科研修医
- 1979年 東京警察病院消化器センター内科
- 1980年 東京大学医学部第2内科医員
- 1984年 米国UCLA客員研究員
- 1987年 東京大学医学部第2内科助手
日本赤十字社医療センター第1消化器科
帝京大学医学部第1内科講師
- 1990年 帝京大学医学部第1内科助教授
- 1998年 帝京大学医学部内科教授
- 2010年 帝京大学医学部附属病院副院長（併任～2013年）
- 2011年 帝京大学医学部内科学主任教授
- 2013年 帝京大学医学部長（併任）

認知症の患者数は増加を続けており、医学的だけでなく、社会的にも問題となっている。前半はこの分野の第一人者の先生方に医学的観点からご講演いただいたが、後半は社会的側面のご講演2題の発表をお願いしてある。

1人目は、NPO法人 認知症フレンドシップクラブの徳田雄人氏で、「認知症の人にやさしいまちづくり」の講演をいただく。徳田氏は、NHKで医療や介護の番組を担当した後、退職され、NPO法人の理事に就任し、認知症患者さんを地域や社会で支えて行く取り組みに従事してこられたが、その現状について社会の取り組み方のお話をいただく。

2人目は、タレントの荒木由美子氏から、「介護のミカタ～よりよい介護のために～」の演題で特別発言をいただく。荒木様はご主人の湯原昌幸氏との結婚直後に、ご主人のお母様が倒れて入院となり、その後認知症を発症、お母様が他界する2003年まで、長きにわたり介護にあたってこられた。その間、かなりの修羅場もくぐってこられ、それらの経験についてのお話と、現在そしてこれから介護にあたる人々への貴重なアドバイスをいただけると考える。

認知症の人にやさしい まちづくり



NPO 法人 認知症フレンドシップクラブ
理事

トクダ タケヒト
徳田 雄人



主な研究領域

認知症フレンドリーコミュニティ

主な著書

「認知症の人にやさしいまちづくりガイド」(国際大学)

「認知症医療」: 認知症の人が活用できるインフォーマルサービス (中山書店)

「老年精神医学雑誌」第28巻第5号: Dementia Friendly Communityとはなにか (ワールドプランニング)

2001年 東京大学文学部卒業
日本放送協会入局 (番組ディレクター)
認知症を中心に、医療・介護の番組を制作

2009年 NHKを退職

2010年～現在
NPO法人認知症フレンドシップクラブ
理事

2012年～現在
株式会社スマートエイジング代表取締役

2013年～現在
認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ共同代表

2014年～現在
国際大学グローバル・コミュニケーションセンター客員研究員

2015年～現在
筑波大学非常勤講師

認知症の人の行方不明、交通事故、詐欺や横領、お店などサービス業における認知症の人のトラブル。ここ数年、認知症のことが毎日のようにニュースになっている。認知症の人が増える中、医療や福祉以外の分野でも、認知症の人とどのように接して行くかが大きな課題になりつつある。

近年、国際的に注目を集めるキーワードのひとつが、認知症フレンドリーコミュニティ (DFC) である。医療を中心とした従来の考え方では、病気が問題を引き起こすので、予防や治療で問題を減らそうというアプローチである。それに対して、DFCの考え方では、認知症に関係する出来事を、認知症に伴う症状を持つ人々と周囲の環境との間で起こる現象ととらえ、病気ではなく、地域や社会の側を変えていこうというアプローチである。

認知症施策の先進地である英国では、こうしたアプローチが広まっており、各地の町ごとに認知症フレンドリーコミュニティを目指すネットワーク (Dementia Action Alliance) が結成されている他、企業も取り組みを始めている。日本でも、静岡県・富士宮市や福岡県・大牟田市などが、日本を代表するDFCとして、国内外でよく知られるようになっており、商業者や交通機関などを巻き込んだまちぐるみの取り組みが徐々に広がりつつある。

特別発言「介護のミカタ」 ～よりよい介護のために～



タレント

アラキ ユミコ
荒木 由美子



主な著書

「覚悟の介護」（ぶんか社）
「夫婦力22章」（バジリコ）
「介護のミ・カ・タ。」（文芸社）
シングルCD「私はブランコ」（ティチクエン
タテインメント）

経歴等

「第1回ホリプロ・タレントスカウトキャラバン」にてデビュー後、多数のレギュラー番組を持ちアイドルとして、また司会やドラマなど、数々レギュラーを持って活躍。
1983年、湯原昌幸と結婚を機に芸能活動を引退。
2004年、結婚2週間後から20年間の義母の介護の体験をまとめた「覚悟の介護」の発売を機に芸能界復帰。テレビ、ラジオの司会やコメンテーターに加え、介護や家族をテーマに各地で講演活動を行っている。
2017年12月にはレコードデビュー40周年を迎え、『私はブランコ』をリリース。「みんなのうた」（12、1月）でオンエアされている。

結婚2週間後に、同居の義母が倒れ入院。甘い結婚生活の代わりに訪れたのは20年にわたる介護の日々でした。糖尿病、高血圧などの成人病に端を発し、その後、認知症を発症。13年の在宅を経て施設での7年の介護。施設に入ってからほぼ毎日通い詰めました。

23歳から始まった介護生活は子育てと並行の20年。介護が始まったころは、今のように相談できる場所や専門職の方々は少なく、誰にも相談できず、暗いトンネルを、どちらに行けばいいかわからない中を、でもひたすら懸命に歩くしかないというような日々でした。

また、復帰した2004年は、まだ認知症をオープンに話す環境にはなく、まだ痴呆症という呼称でした。現在は、社会において、ずいぶん認知症に対する認識や対応が進化してきていますが、まだまだ孤独の中で介護をしている方々が多くいらっしゃることを、各地での講演活動を通じて実感しています。

2025年、日本の認知症患者・認知症予備軍の数は合計700万人を突破すると予想されています。認知症の介護者が置かれている現状から、これから、どうすればよりよい介護ができるのかをみなさんと考える機会になればと思います。

生命をテーマに未来と語りたい。

私たちは医療の分野を担う企業人として、
これまでも医薬品や臨床検査薬などの研究・開発に携わってまいりました。

私たちの製品が医療の新しい可能性を拓くことのお役に立てたとすれば
それは全社員の大きな喜びでございます。

今後も未来の分野にチャレンジし続ける企業でありたいと考えております。

また、そのような企業姿勢は社名にも反映されています。

REBIO＝レビオとは、

RE（蘇生）とBIO（生命）の2つの言葉を組み合わせた、

「生命の蘇生を願う」私たちの夢を象徴するものです。

医師や検査技師の先生方のよきパートナーとなり、

かけがえのない生命の蘇生に貢献するために、

私たち富士レビオ・グループはさらに努力を続けてまいります。

これからも一層のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

—新しい価値の創造を通じて世界の医療に貢献します—



メディコピア教育講演シンポジウム

富士レビオ株式会社は1981年（昭和56年）より、メディコピア教育講演シンポジウムを主催してまいりました。これからも、継続して開催していきたいと考えております。今まで開催いたしましたシンポジウムのテーマは下記のとおりです。今後の希望するテーマやご意見を、同封のアンケート用紙によりお聞かせ下さい。なお、メディコピア教育講演シンポジウムは、毎年1月に開催いたします。

第 1 回	1981.1	新しい免疫学への招待
第 2 回	1982.1	癌は制圧できるか
第 3 回	1983.1	免疫遺伝子の応用と将来
第 4 回	1984.1	人間はどこまで生きられるか
第 5 回	1985.1	食物の昔・今・未来
第 6 回	1986.1	こころと医療情報へのアプローチ
第 7 回	1987.1	風族病—その背景
第 8 回	1988.1	老人性痴呆は防げるか
第 9 回	1989.1	スポーツと健康
第 10 回	1990.1	住居と健康と病気
第 11 回	1991.1	気象病と季節病
第 12 回	1992.1	痛みの科学
第 13 回	1993.1	身近な遺伝学
第 14 回	1994.1	航空医学と宇宙医学
第 15 回	1995.1	脳はどこまでわかるか
第 16 回	1996.1	心筋梗塞はなぜおこる
第 17 回	1997.1	忍びよる糖尿病
第 18 回	1998.1	遺伝子医療
第 19 回	1999.1	骨と健康
第 20 回	2000.1	生命の科学
第 21 回	2001.1	肥満
第 22 回	2002.1	話題の感染症
第 23 回	2003.1	高齢者と医療
第 24 回	2004.1	メンタルヘルス
第 25 回	2005.1	アレルギーと関節リウマチ
第 26 回	2006.1	食物と健康
第 27 回	2007.1	21世紀の対がん戦略
第 28 回	2008.1	睡眠と健康
第 29 回	2009.1	インフルエンザの最前線
第 30 回	2010.1	動脈硬化をめぐって
第 31 回	2011.1	腎臓病
第 32 回	2012.1	血液の病気
第 33 回	2013.1	肝臓の病気
第 34 回	2014.1	栄養と食欲
第 35 回	2015.1	転換期の高齢者医療
第 36 回	2016.1	がん診療はこう変わった
第 37 回	2017.1	糖尿病診療の未来
第 38 回	2018.1	認知症

MEMO



A series of horizontal dotted lines for writing.

MEMO



A series of horizontal dotted lines for writing.

MEMO



A series of horizontal dotted lines for writing.



メディコピア教育講演シンポジウム実行委員会

〒163-0410 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング
富士レビオ株式会社